
東方空間記

まいく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方空間記

【Nコード】

N2298Y

【作者名】

まいく

【あらすじ】

これは大昔に生まれた妖怪の少女のお話

警告

この作者には激しく文才がありません
読んだ人が黒歴史を抉られるような気分になっても一切責任を負えません、ご注意ください

それでもおっけてかたはどうぞ！

ブログみたいな何か（前書き）

作者は文才ない上に意味不明ですがどうぞっ！

プロローグみたいな何か

「……ここはどこ？」

森の川の前の声

その声は幼い少女の声だった

「……わたしは、誰なの？」

今生まれた、只の妖怪の少女

その瞳は何も知らない、純粋な目をしていたな

ただ、生まれたばかりであっても妖怪は服を着ているようだ

青衣着物にフリルがついた、見た目相応の可愛い服だ

「……お腹、すいたな……」

少女は空腹だった

「……お魚……」

目の前の川の魚を見て彼女は信じられない事をした

なんと先ほどまで川を泳いでいた魚が彼女の手に乗っているのだ

また、その手の袖は先程まで乾いていたのに今は濡れている

魚を掴んだ程度では有り得ないほどに

「焼いて、食べようかな」

彼女はそれがさも当然かのように振る舞うがそれは彼女の能力が生まれつき『ある』という自覚があったからであり、普通の妖怪はでない

この若い少女の、能力は

『空間を操る程度の能力』

この妖怪の少女は仲間がまだ殆ど居ないことを、まだ知らない

そして、とても長い年月を生きるとは、この少女は知る由もなかった

プロローグみたいな何か（後書き）

突発的に小説書きたくなることが稀によくあるまいくです！

今回は三人称形式でしたが次からは一人前になります！

襲われたようなかんじ(前書き)

うんもう前から意味わからないね！
何がしたいのか作者にもサッパリです！

襲われたようなかんじ

私は名無しの妖怪。 10歳

何の前触れもなく只、そこにポンと生まれた

当然、何かするアテもなく、毎日能力を使う練習をしてる

……さすがに飽きたなあ

「人間がいるところに行ってみようかな」

人間食べようと不思議と思わないけど、見てみたいなあ

そう思って私は人里に向かった

「キシヤアアアアア!!!」

人里に向かう途中の森で妖怪に絡まれた

大きいクモできもちわるい

「……なに？」

「キシヤアアアアア！！！」

なんだろう人間と勘違いしてるのかこの辺が縄張りなのか知らないけど襲ってくる

鋭く尖った足で私を突き刺そうとする

ただの人間や、私のような幼い妖怪にとっては本当に危険な一撃だろう

だけどそんな攻撃

「私には届かないよ」

私とクモ妖怪の間の空間を『固定』する

するとクモの足が空間な阻まれ、私はその隙にクモの体内の空間と足の阻まれた空間をつなぐ

そうしてクモは、自分の足で自分の心臓を貫き、死んだ

「呆気ないなあ……」

ピクピクとまだ動いている気持ち悪いクモに相手が悪かったね、とつぶやいた

まあ、気を取り直して人里に行こう

襲われたようなかんじ（後書き）

主人公の設定とかはだいたい次の次あたりになります！

名前って大事。たぶん(前書き)

今回は戦闘です

うん期待しないでくださいwww

名前って大事。たぶん

とりあえず人里行ったら

「よ…………妖怪だあ！」

「おのれ、ここから立ち去れ！」

「きゃっ！？止めて〜！」

こんな感じで逃げ帰ってきた

でも中はちよつと見えたよ？草育ててた

なんでも『いね』って言うらしい

まあそれはともかく…………

「あんまり面白そうじゃないなあ……………」

何もすることないし、能力使う練習でもしようかな…………

（百年後）

私が百年くらい鍛えててわかったこと、それはまず

身体能力が低過ぎ、もうそれだけなら雑魚妖怪に匹敵するくらいだね

妖力で身体能力は上げられるけどこれは酷すぎる……

能力は使い方が段々わかってきて、今ならかなり離れた所にも能力で移動出来るようになった

あとは色々空間操作で空間の広さを変えたりとか空間と空間を切り離したりとか……

それと自分の妖怪としての能力は、まず妖力が飛躍的に上がって妖力を隠せるようになった

中級レベルなら確実に勝てるレベルだとおもう

こんなところかなあ、周りから見たら凄く早い成長らしいけど実感がわからないなあ

あと人間が（食料的な意味で）大好きな妖怪が村の人食べ尽くすっていうのとめたら戦闘になった。現在進行形で

「っと……だからちょっとずつ一年に1人とかならともかく1日村一つとか人間いなくなっちゃうでしょ!？」

妖力でできた弾や妖力を込めた爪で攻撃してくる

まああんまり大したことないから焦ったりはしてないけど

ただ能力なのか音を聞く度に幻覚をかけてくるのが少し鬱陶しい

「私は食べたい時に食べるのよ」

自己中だなもう……

「ああもお！食べ尽くしちゃったらもう食べられないんだよ!?!?いいの!?!?」

「そんなの、居なくなっしてから考えればいいわ」

はあ……めんどくさいなあ

「なら、こころしましょう。私が勝ったら食べに行く。あなたが勝ったら我慢してあげる。これでどう?？」

どうやら勝つ自信があるらしく表情はとても余裕そうだ

うんまあ生きてきた年数から考えれば彼女のほうが強いとは思っけどね

「いいけど……本気でいくよ？」

ーダンッ！

妖力で脚を強化、その後空間を固定して足場に急接近した

彼女は驚いた様子だったが薄く笑うと、その場から消えた

どこに行ったのだろうかとうと急停止、後ろを見ると

二人に増えた彼女がいた

「……………え？」

なに？なんで増えてるの？

「そういえば、私の能力を言ってなかったわねえ。私の能力は『鈴の音で惑わす程度の能力』よ。まああなたは強いからこのくらいが限界だけどね」

いやいや攻撃外したら反撃食らうから下手に接近戦出来ないし、充分だと思っただけど

そう思いながら妖力の弾で一方を、接近戦で一方を、そして念のため私の周囲の空間を固定しながら攻撃すると

「残念でした って、ええ!？」

妖力弾が当たった方も接近戦を仕掛けた方もハズレて当たった瞬間ポスツと音を立てて消え、本物が攻撃してくるが固定した空間に阻まれ

「今っ!」

「え?!ちよっ、待って!ギブギブギブ!」

できた際に空間を固定し、固定した空間を圧縮していったらギブアップ

「潰されるかと思った……」

「潰さないよ……たぶん」

「たぶん!？」

しかし彼女は強かった……彼女じゃ呼びにくいな

「ねえ、あなた名前は？」

「私?私は鈴音永歌よ。永歌って呼んでくれて構わないわ。あなた

は？」

私？私は……

「名前は……ないかな」

「……はあ？」

いやはあ？って言われても……

永歌は少し考えると

「ねえ、どうせ名無しなら私が付けてもいいかしら？」

「別に構わないけど……どんな名前？」

永歌はそうねえ……と呟いた後

「咲空^{さくく}なんてどうかしら？」

「咲空か……うん、気に入った。使わせて貰うね？」

こうして私は名前と友達を手に入れた

名前って大事。たぶん（後書き）

うんさつさと東方キャラ出せと聞こえるがあと二〜三話後ですね！

早くレティさんやパルスィやこいしちゃんにあいたい……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2298y/>

東方空間記

2011年11月6日03時05分発行